—資料4—

カルチャーショック

（国際交流の欄）

32

人民幣と外貨兌換券

SUENAGA　OSAMU
末永　敏

1981年7月末から12月末まで，私は学振の特定国派遣研究者として中国に滞在し，中国科学院上海昆虫研究所をベースとして糸状虫症媒介蚊の研究に従事した。中国へ行った際，我々は通常，持参した円を中国の通貨「元，角」に交換してもらって使用する。中国銀行発行のこの通貨は兌換券とよばれ，再び円と交換することもできる。ところが私の場合，中国内での旅費，滞在費等は一切，中国人民銀行発行の人民幣で支給されたので，これを使う際にときどきトラブルが生じた。最初のトラブルはホテルの理髪店で支払いの際に生じた。人民幣を出したところ，「あなたは外国人なのに，なぜ人民幣を持っているのか」と疑われたのである。幸い，同じホテルに中国科学院外事局の担当者が泊っていたので，彼の取りなしで簡単に解決した。このようなトラブルは買物や食事の際にもときどき生じた。帰国前の12月下旬，私は長崎市の姉妹都市，福州市を訪ねた。その際，航空運賃を人民幣で支払うつもりでいたところ，事務職員がたいへん困った顔をして「航空会社が兌換券でないと受けとらない」というのである。結局，往路分は手持ちの兌換券で支払い，復路分は私のもっていた人民幣を国から福州市に割当てられていた兌換券と交換してもらい，航空会社へ支払うことで結着した。福州市の担当者には御迷惑をおかけした。私は翌年も中国に来て仕事を続けることにし，残っていた人民幣を銀行に預けて帰国した。

1982年に再び訪中した私は，週末を利用して蘇州を訪ねた。軟車の座席は6人掛になっており，中国人1人（私の付添人，唐氏），タイ国在住の華僑2人，外国人3人（フランス人夫妻と私）が掛けていた。上海駅発車後間もなく，華僑の1人が「乗車券が高すぎる」と言い出した。全員が乗車券を出して比較した結果，3通りあることがわかった。最も高いのは外国人料金，次に高いのは華僑料金で約半額，最も安いのは中国人料金で華僑料金の更に約半額であった。華僑は「同じ中国人なのになぜ運賃に差をつけるのか」と不満をもらしたわけである。唐氏は中国の労働者賃金を含む国内事情について熱心に説明していたが，ついに納得されなかったようである。

（熱帯医学研究所助教授）

福州市人民政府に游徳馨市長を表敬訪問したときの筆者（左から2人目）

マッキントッシュ氏のこと

YOSHIKOSHI KAZUMA
吉越　一馬

マッキントッシュ氏はスターリング大学の gardener である。月に2回大学が所有するフラットへ庭の手入れにやって来る。一昨年3月から10ケ月間，文部省在外研究員としてスコットランドのスターリングに滞在した私は，遠来の家族連れということで，大学のフラットに入れて貰った。この住いは家齢100年以上，4世帯用の大きな二階建石造りで，2世帯分は個人の所有であった。階下には。私達が愛称で“パキちゃん”と呼んでいたパキスタンから留学していたアクタール氏が住み，その隣に70過ぎのターナー夫妻が住んでいた。この二家族とはすぐに顔馴染みになったが，どういう訳か二階の隣人とは時折壁越しに聞こえる物音だけで，ついぞ挨拶を交す機会がなかった。

2週間毎にやって来るマッキントッシュ氏は，まずパキちゃんの庭の手入れをし，それから我家の芝生を刈る。夫々の庭には小さな花壇，20坪ほどの芝生，西洋シャクナゲの植込み，それに庭を境する生垣があった。私が芝刈り以外は暇々に手入れをしていたので，彼はパキちゃんの庭では大抵1時間半ぐらい作業して

—資料5—

いたが，我家の庭では精々10分か15分，ブンブンと芝刈機の音をたてると，私達が気付かぬうちにさっさといなくなってしまうのが常だった。ところが芝がよく伸びる夏のある日，家内が「その音」が止むのを聞き付けて，お茶を勧めたところ，彼もこの家の住人に興味があったのか，いつもの作業とは対照的に1時間余りも話し込んで帰っていった。彼はいつも小笛を携行しているスコティッシュミュージックと民族ダンスの愛好者であった。

秋が深まった十月のある月曜日の晩，同好の集いに誘われた。予定の刻限が近ずくと，楽器を持った人も持たない人も三々五々鄙びたホテルの奥まった大部屋に集まってきた。まずビールで喉を潤す。若い人も結構多い。チビチビ飲みながらの演奏の合間に老婦人が立って詩を朗読した。意味はよく解らなかったが，澄んだ美しい声だった。心が豊かになる楽しい一夜だった。秋から冬にかけてスコットランドの夜はとても長い。

マッキントッシュ氏は60少し前だろうか。やや病弱な奥さんと3人の嫁さんを育てた平均的なスコティッシュである。決して裕福そうではなかったが，暗いところは微塵もなく，日本よりかなりゆったりとした時の流れに抗うことなく，仕事に趣味にと人生を楽しんでいる風だった。「停年になったら日本へ遊びに来ませんか」と水を向けたら，到底無理だと首をすくめた。私達が帰国する直前に，もう冬枯れで庭仕事は無かったのだが，わざわざ尋ねてきてくれた。昨年のクリスマスには音楽好きの娘にミュージックテープが送られてきた。中身は勿論スコティッシュである。

家族同伴だったこともあって，この海外出張で研究者以外に多くの友人.知己を得た。私達の大切な宝である。

（留学生指導主事・水産学部教授）

私の日本人論　《第4回》

中国の旅

NISHIDA NORITERU
西田　知照

1993年11月，北京で歯車に関するシンポジウムがあった。シンポジウム終了後，西安，成都の国営工場を見学し，上海経由で帰国した。

私有財産が認められた中国では，都市部では乗用者の数も多い。ほとんどは私企業の所有車かタクシーである。朝夕の通勤ラッシュ時は自転車の大群が道幅一杯になって進む中を車がクラクションを鳴らしながら疾走していく。マイクロバスに乗っていて，何度も自転車を跳ねたと思った。現地の運転手も自転車に乗っている者も，ぎりぎりの所まで進路を譲らない。絶妙のタイミングで事故を回避する。一見，交通法規など無いかのように思えるが，正規のルールではないにしても，生活上から生まれた一定の交通ルールが存在している点には感心させられた。このあたりは，日本人には真似できないところだろう。

北京では人民公会堂でレセプションが開かれた。人民公会堂の中には，中国の各省がそれぞれ別々の宴会場を持っており，各省の名物料理を出すのだそうだ。さすが中国だ。スケールが違う。我々は江西省のホールでご馳走になった。

西安では歴史博物館で，かの有名な兵馬俑（へいばいよう）も見学した。秦始皇帝の死後を守る兵と馬の実物大の焼き物群だ。その発掘は現在も続いている。そのスケールの大きさは実物を見なければ分からない。秦始皇帝の途方もない権勢の大きさと共に，中国歴史の偉大さを知らされた。

西安の餃子店にて（左側が著者）

西安では名物の餃子を食べた。水餃子もあるが，我々は蒸し餃子を食べた。小つぶだが，中身が一個づつ違い，実に美味しかった。一人が40個食べ，皆大いに満足した。

成都では三国志で有名な諸葛孔明の廟などを見た。ここはマーボ豆腐の発祥の地だ。この地は盆地で，湿度が高いので，辛い物を食べて発汗を促さないと健康に悪いのでマーボ豆腐が生まれたとのことだった。本場のマーボ豆腐はすごく辛く，日本人には無理と言われた。我々が食べたのは辛さを押さえた日本人向けのやつだった。それでも辛かった。

歴史を勉強して行くと，無尽蔵に楽しめる感じがするところが中国だ。日本文化のルーツである歴史上の中国と新しい中国が混在しているのが，今の中国だ。

（留学生指導主事・海洋生産科学研究科教授）